

## 横浜市金沢低地の発達過程とその名所としての受容

—「金沢八景」の成立をめぐる—

佐藤 ゆきの

人が自分をとりまく環境を客観的にとらえ、それと「親し」み始めたのは、江戸時代からといわれる。一方で、人間が親しむ対象である環境も、自然的・人為的要因の別を問わず、それらによって絶えず変化し続けてきたものである。本稿ではこのような認識のもと、まず対象地域の発達過程とそれに人間活動が加わって形成された「環境」を明らかにした上で、名所というひとつの環境に対する見方の形成を例に、江戸期に人間と環境がどう関わってきたのかを、人間の活動・意識の両面から探っていくことを目的としている。

金沢低地の平潟湾一帯は、縄文海進以降北からの強い沿岸流を受けて海成砂が広く厚く堆積し、やがてそれは後に称名寺の参道となる線上に砂州となって現れた。ついで野島方面への砂州が発達し、古墳時代頃には、それらによって湾内が完全に閉塞し、南に湾口を向けた現在の内湾環境がほぼ整えられた。

やがて中世の鎌倉との深い結び付きを背景に、金沢低地には称名寺・瀬戸神社を始めとする神社仏閣が次々に建てられ、町屋も発達してゆく。二本の砂州の間で始まった塩田も、江戸時代の半ばには新田と共に沿岸部一帯に広がった。中世以来その勝景が知られ、江戸時代前期にはほぼ位置が定着したといわれる八景の舞台は、このように、人々の生産活動が活発に行われる場であった。

金沢八景は、中国の瀟湘八景を念頭において名付けられた「名所」とされる。しかし、江戸時代後期に現地でも大量に刊行された絵図類を検討したところ、現実の環境そのものではなく、また、瀟

湘八景のイメージを単にあてはめたものでもなく、その両者を巧みに組み合わせて「再構成」されたものであった。おりしも江戸市中を中心に大変な「図会もの」の出版ブーム、その挿絵の担当者として錦絵師たちも大活躍をしている時代であった。金沢においても例にもれず、地元の刊行元と広重の盛んなやりとりがなされている。人々にとっても実際に現地へ赴く前にあれこれ情報が得られることとなり、それゆえに大衆レベルにおいて人々の思い描いた未だ見ぬ金沢の風景は、必然的に彼ら錦絵師たちの描いた情景によるところが大きくなったのである。彼らの思い描いた風景（大衆レベルでの金沢の地に対する環境観）は、その確立所以ゆえに刊行絵図へ再びフィードバックしてゆく。すなわち、人々が絵図を片手にそこに描かれた自分の抱く風景の根である情景を一つ一つ「確認」していくことが重要になるにおよび、絵図のほうでもポイントを強調していくようになるのである。期待した通りの「風景」が得られるこの地は、急速に「名所」として受け入れられていった。

結局「金沢八景」は、人間の活動で刻印された自然景観である「環境」に人々の空間認識が加わってつくられた「名所」であった。その名所としての形成に深く人が関わっていたがゆえに、地形としては日本独自の面題である砂州を選び、海の浅さ故の潮の満ち引きによって一転する景観を売り物にしていたこの地が、それらの大半を失った戦時中においてもなお、人々のそのひとつの環境観を通して、その地位を保ち続けたのである。